

## 共同研究プロジェクト

# 宇治の音風景

## 2017年度活動報告

馬場 雄司・吉村 夕里

本研究プロジェクトは、それまでに活動を続けてきた宇治市民有志からなる「宇治音風景100選」実行委員会（実行委員長・京都文教短大安本義正学長）による宇治音風景の収集事業に基づいている。

1996年に全国的規模で行われた環境庁（現・環境省）が「残したい日本の音風景100選」事業を行い、日本各地でもそうした試みがなされてきた。宇治市においても、自然の豊かな地域での川の流れや鳥の声、お茶を売る声、祭りの音、寺院の鐘の音など、音に注目することで、宇治の新たな魅力を引き出すことができる。このような趣旨のもと、2015年11月から2016年10月まで、「宇治音風景100選」実行委員会が宇治の音風景を募集した。しかしながら、収集された音には地域的偏りや重複も見られ、またその数も十分とはいえなかった。

以上の経過を踏まえ、当プロジェクトでは、「宇治音風景100選」実行委員会と共同で、収集された音の中から選定委員が20の音を選定して100選の一部として候補とし（2017年7月）、募集を継続することとした。現在、琴坂（興聖寺）、三室戸寺の鐘、鶴飼の鶴の声、水琴窟（京都文教大）、縣祭、JR 駅前の茶摘み人形などがあがっており、必要に応じて施設の許可を得て認定への作業をすすめている。また、実行委員の塩田俊樹氏がパーソナリティを務めるFM うじの番組「音楽で遊ぼう」の中の「宇治音風景100選コーナー」で、募集の呼びかけと音の紹介を行った（2017年9月～2018年2月）。

更に、馬場、吉村が視覚障害者の感じ方の研究を行う国立民族学博物館准教授・広瀬浩二郎氏の協力を得て、視覚障害のある方々との音集めを行い（2018年2月2日）、様々な指摘をい

ただいた。例えば、宇治川沿いの興聖寺の琴坂に流れる妙なる水音を、多くの人が音風景としてあげるが、視覚障害のある方は、水道の音の方が美しく感じたようであった。晴眼者は、周りの苔むした景色とセットで「妙なる音」と認識するのであり、視覚優先社会における音の感じ方であることが示唆された。しかし、この水が琴坂の道の両側を流れていることで中央の歩く道を明確にでき、水音のバリアフリーへの利用の可能性が示唆された。視覚障害者の音との関わり方や音世界から、音に関してより多様な視点が提供される可能性を感じた。

以上の活動の総括として、2018年2月10日に、シンポジウム「宇治の音風景100選から考える音・人・自然」を開催した。コーディネーターを馬場が務め、実行委員長の安本義正氏から宇治の音風景100選の経過・意義などについて説明、選定委員でもある小松正史氏（京都精華大学教授）、曾和治好氏（宇治市植物公園園長）と、外部アドバイザーの松本公博氏（カテリーナ古楽器研究所所長）をシンポジストに迎えて議論を行った。シンポジストからは、音をきっかけにした五感全体を使う広がりのある感覚への気づき、行政主導ではないアプローチの重要性、日本の水音を意識した景観認識、美しい景観から美しい音風景への注目、生活の中の音に耳を傾けることの必要性など、重要なポイントが指摘された。また、フロアーとの議論では、生み出される音のみでなく吸収される音への着目、地域の音のもつ物語性、音に着目することで生まれる心のバランスや豊かさ、子育てにおいても親が音に好奇心をもつ必要性などが指摘され、音を含めた環境への着目とともに、生き方にかかわる議論に及んだ。この後、カテリー

ナ古楽器研究所のメンバーによる、自然素材による手作り古楽器の音色を楽しんだ。

今年度の活動をもとに、今後は更に、宇治市内 NPO 団体の協力のもとに、音の収集を継続したい。音風景の選定事業は、その選定のみが目的ではなく、そのプロセスにおいて、住民自らが地域の「音」に気づき、自分達が住む地域の環境・生活、ひいては生き方に目をむける効果ももたらす。シンポジウムではそうした点を確認することができた。